

# 琉球大学学術リポジトリ

## 延宝年間金沢城下図を用いた高等学校出前授業

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2015-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮内, 久光, Miyauchi, Hisamitsu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/32785">http://hdl.handle.net/20.500.12000/32785</a>

## 延宝年間金沢城下図を用いた高等学校出前授業

宮内久光

### A Lecture on Old Kanazawa City Map in High School

Hisamitsu MIYAUCHI

地図は現代社会には欠かせないツールである。行政が地域計画を立案できるのも、宅配便業者が正確かつ効率的に荷物を集配できるのも地図があつてのことである。近年のコンピューターの発達により、紙地図からデジタル地図へのシフトは著しいものがあるが、地表面上に分布している地理的要素を平面上に一定のルールの下で表現したもの、という地図本来の本質には変わりない。

正確な地図が必要なのは現代人だけではない。古代から人類はなるべく正確な地図を作ろうと様々な努力を行ってきた。正確な地図を作るには、正確な測量が必要になる。古代ギリシャの地理学者たちは地図学者の一面も持ち、測量術にも長けていたという。

日本においても、伊能忠敬(1745-1818)の業績は高い評価を受けている。人工衛星からの画像や空中写真も得られない時代に、簡単な測量器具と歩測だけで極めて正確な地図を作り上げたのは驚嘆すべきことである。東京国立博物館が所蔵する伊能中図を原寸複製した『伊能図』(清水ほか、2002)の各図を眺めてみると、正確さはもとより、その配色の美しさに目を奪われる。海や川は青、山は緑、砂浜は黄、地名は黒、そして側線や街道は赤色で描かれており、伊能図は芸術作品としても鑑賞できる。

伊能忠敬は幕府の命を受けて全国の地図を作製したが、各藩においても領域内を測量して地図を作製している。例えば、大名中最大の石高を有した加賀藩では、1819(文政2)年に郡内の道筋の地図を石黒信由に作ることを命じている。信由は測量を行い、1824(文政7)年に郡内の地図を、翌年には「加越能三州郡分略絵図」と呼ばれる加賀、越中、能登三ヶ国の地図を完成させている(金沢市史編さん委員会編、1999)。

江戸時代は、このように全国あるいは各藩の全体像を表した小縮尺の地図が作製された一方、城下図のような大縮尺の地図も盛んに作製された。その一部は現在、復刻・出版されているため、書店で購入して自宅で見ることがもできる。

10年ほど前に『金沢市史資料編18 絵図・地図』を購入した。この金沢市史資料編は金沢市史専門委員絵図部会の編集執筆で、大学時代の恩師である川崎 茂先生が部会長、梶川勇作先生が専門委員である。さっそく、立派な装丁の箱を開けてみた。本冊では解題として総説の他に、国絵図をはじめ郡図、城下図、金沢城図、町並み図、寺社・屋敷図、城下周辺図、河川・用水図、街道道中図、近代以降の金沢図といった10のカテゴリーごとに解説が付されており、それに版図や挿図が全部で90図以上印刷されている。先述の「加越能三州郡分略絵図」もカラー刷りで収められている。図を見ると精密さと色彩の美しさが再確認され、石黒信由が行った仕事ぶりに

改めて感心させられる。

別冊には様々な各カテゴリーを代表する絵図・地図の複製が26図も入っていた。用紙の大きさはA3からA0まで様々である。大型のA0サイズになると、小さな机の上では収まりきらない。

そのような地図群の中でも特に目を引いたのは「延宝年間金沢城下図」（以下、延宝金沢図）である。延宝年間とは1673～81年までの期間で、4代将軍徳川家綱の治世である。金沢市史の解題によると、この図の原図は縦（東西）545 cm、横（南北）590 cmにも及ぶ大きなもので、現存する城下図としては最大であり、藩用図として作製されたものである（76頁）。縮尺は約1/690と極めて大縮尺である。金沢市役所都市計画課が作製して一般に販売をしている最も大きなスケールの地図は1/2,500であるから、この城下図がいかに詳細な地図であるかがうかがえる。これを金沢市史では「武士名が読み取れる様に複製」して、約1/3,000のスケールに縮小をして別刷している。縮小したといっても、A0の用紙2枚で金沢の城下町全体を表しており、見ごたえは十分である。

さっそく、別刷図を研究室の壁に掲げて鑑賞してみた。薄い卵色の地を背景とし、浅野川と犀川をはじめとする川や用水、そして城内の堀は空色で表現している。内堀と外堀はさらに藍色を重ねて強調をしている。この深い藍色が地図をぐっと引きしめた感じにしている。卯辰山をはじめとする近郊の山々は若葉色でうっすらと描かれ、地の色と馴染んでいる。街路は黄色で表現され、道幅に応じて太さが異なっている。細かな路地も描かれ、T字路や鍵型の城下町特有の街路形態が確認できる。藩施設や寺社、侍屋敷はその範囲が区画され、名称が黒色で記入されている。この地図は江戸時代の住宅地図だともいえる。

ところで、侍屋敷は家長の名前が一軒一軒記入されているが、町人たちの居住地はただ朱色で「町屋」と書かれていて、住人の名前が見えてこない。また、足軽屋敷も同様で、黒色で「足軽拾人」あるいは「足軽八人」などと表記されている。町人や足軽は長屋形式の家屋に居住していたため、世帯ごとの名前を小さな長屋の中に書き込めなかったという一面もあるだろうが、ここから江戸時代は身分制社会であることが地図を通して見えてくる。

この地図の精度はどれくらいだろうか。近代的な測量方法を用いていないので、地図の精度は地図内でも一様ではない。金沢市史では様々な城下図を「四定点測定値比較法」と名付けた方法で縮尺規模の検討をしている。これは地図上でなるべく離れている4点を選び、各点間の地図上の長さを測る。それを現在の地図上で同じ4定点間の測定を行い、各縮尺の場合の値を概算した表を用いて、個々の地図の測定値と比較する方法である（表1）。この方法で金沢市史は各地図の縮尺を求めているが、この表を用いると地図の精度もある程度推測することができる。

ここで、表1の延宝金沢図内のA→Bを基本線として、地図の縮尺を仮に固定した上で、A→C、A→D、B→C、B→D間の理論的な長さの値を算出して（B）、延宝金沢図上の実測値（A）との比率（ $(A)/(B) \times 100$ ）を求めてみた。その結果を表1に記載した。それによると、A→C間の理論値は346.9 cmである。対して延宝図上のA→C間の実測値は347.0 cmであり、その差はわずか1 mmに過ぎない。比率は100.03であり、極めて縮尺は一定している。A→D間は理論値も延宝図も218.5 cmと一致している。B→C間、B→D間も比率は99%台であり、どの点間を測定しても理論値と延宝図上の実測値はほぼ一致する。すなわち、延宝図は極めて精度が高い測量をもとに作製された歪みの少ない地図であることが明らかになった。

表1 四定点測定値比較法の結果

絵 図 名	A→B	A→C	A→D	B→C	B→D	平均縮尺
1分1間図標準値	429.0	400.0	252.0	402.0	333.0	1/600
延宝金沢図(県立)(A)	372.0	347.0	218.5	348.0	287.0	1/690
基本線固定時理論値(B)	372.0	346.9	218.5	348.6	288.8	—
(A)/(B)×100	—	100.03	100.00	99.83	99.38	—

(金沢市史編さん委員会編, 1999をもとに筆者作成)

城下町図を使った地理学的研究は、矢守一彦氏の近世城下町の空間構造に関する研究(矢守、1970)が有名である。矢守氏は近世城下町のプランを(1)戦国期型、(2)総郭型、(3)内町・外町型、(4)郭内専士型、(5)開放型の5類型に分類した。金沢はこのうち、内町・外町型に相当する。そして、城に近い部分から重臣屋敷、一般武家屋敷、商人町、職人町と身分階梯に配置されていた。寺社も意図的に集められて、戦いの際の軍事拠点になるように想定されていた。近世城下町は綿密な都市計画に基づいて建設された一種の計画都市であり、それが現在の日本の県庁所在地クラスの都市の母体となっていることを考えると、城下町の空間パターンを知ることは、現代日本の都市構造を理解することにもつながると言えよう。

そのような考えを抱いている時に、沖縄県立八重山高校での出前授業を行う機会を得た。そこで、地理の授業を1校時(50分)担当させてもらうことになった。本時の主題(テーマ)は自由に決めてよいとのことなので、この延宝金沢図を用いて江戸時代の城下町の空間パターンについて授業を行うことにした。高校生たちに、江戸時代の地図の素晴らしさを味わってもらいたいという気持ちの他に、大学における歴史地理学の初歩を地図から体験してもらいたいというねらいがあった。授業当日の学習指導案(略案)を資料1に、授業で生徒たちに配布したプリントを資料2に付した。授業は知識詰め込み形式ではなく、地図から色々な地理的事象や、事象間の関係を生徒自ら見つけ出して考察し、発表をしてもらうこともねらいとしていた。

2011年10月3日(月)に授業を行った。高校の教壇に立つのは16年ぶりである。担当の先生から紹介を受けて授業は始まった。最初の導入は本時で扱う城下町金沢を導くために、日本三名園の画像から園名と場所を問うクイズを行った。高校生にとっては馴染みがないものばかりで園名は正解が出なかったが、兼六園が金沢市にあるということを答えてくれた生徒がいて、無事城下町金沢に結び付けることが出来た。

展開①は金沢城を築き、城下町を建設した前田氏、とくに藩祖前田利家について日本史と関連させながら説明をした。全国最大の大名家の藩祖でありながら、戦国武将の中では知名度が低い利家であるが、肖像画やイラストなどを見せながら説明すると、興味を持ってもらえたようにみえた。

展開②は金沢城が立地している場所の地形的特徴を鳥瞰図から読み取り、それが前田氏の軍事面や領国支配にどのように有利に働いたかを考察する、という課題を与えた。生徒からは地形面の特徴として、予想通り「大きな二つの川に挟まれている」とか「丘の上にある」などの答えが出てきたが、「扇状地がある」など想定外の答えも出てきた。一方、軍事面については「敵の攻

撃を防ぐことができる」、領国支配については「人が集まりやすい」などの答えを得た。

展開③は本時のメインである延宝金沢図の登場である。黒板に市史別刷の地図を貼り、まずはしばし鑑賞をしてもらった。また、一人一人地図の細部を見てもらうために、延宝金沢図の縮小版を回覧した。これは『太陽コレクション 城下町古地図散歩1 金沢・北陸の城下町』の付録で、延宝森田旧蔵図（石川県立図書館蔵）と呼ばれる地図の縮小復刻版である。市史別刷の延宝図とは同じ延宝年間の作製で、内容的にはほぼ同一である。生徒たちは回ってきた付録地図を手にとって確認をしていた。おそらく初めて見る江戸時代の地図に色々な感想を持ったと思われる。

延宝金沢図の精度や記載内容などについて説明をしたあと、図4を参考にしながら城下町の空間パターンを模式的に図解をした。この図4は田中喜男著『加賀百万石』に掲載されていた図「延宝金沢城下町」（42-43頁）を北が地図の上になるように再配置し、文字を全て90度回転させて打ち直し、見やすく加工した。また、原図では城下町の構成要素（下屋敷、町人居住地、寺社など）をハッチのみで表していたが、蛍光ペンで要素ごとにハッチ上に色を付けて見やすくした。城下町の空間パターンを、自然環境、城、内堀・外堀、上屋敷、下屋敷、足軽組屋敷、町人居住地、寺社の順にその配置を説明し、黒板に模式図を描いた。城下町の各構成要素が地図上でどこに配置させているのかは、生徒自身に図から読み取らせるようにした。前田氏が城下町の構成要素を何故このようなパターンで配置したのか、その意図を発問したが、模式図からだけでは正解が得られなかった。

最後に加賀八家の中で、最も家柄が高い筆頭の家臣は誰なのかを問うた。勿論、それを知識ではなく、地図から考えさせることが発問の意図である。「本多安房守」「屋敷が広いから」と理由も含めて正解を発表した生徒がおり、地図から権力関係を正しく推測することができていた。もう一つ用意していた回答である本多家には「安房守」という官位が唯一付いている、ということにはさすがに誰も気がつかなかった。補足ながら、田川（1995）の加賀八家の当主一覧によると、延宝年間の本多家の当主は政長である。彼が安房守を受領したのは元禄4（1691）年と記されており、地図作製時よりも後のことである。ただし、延宝年間にはすでに前田家臣団内では安房守と認知されていたわけで、地図にも加賀八家で唯一大名なみの受領名が記載されているのである。そこにも本多家が家臣団の中では別格の家柄であることが表れているといえよう。

50分の授業はここで終了となった。なんとか展開③の最後まで終わらせることが出来たが、準備していたまとめはできなかった。やはり大学の講義（90分）と比較すると時間的なゆとりが無かった。今回の授業内容は、本来は展開②以降はグループ学習をさせ、グループ内で話し合ったり、その結果を発表させることを行えば、よい教育効果をあげられたのではないと思われる。ただし、それには3校時分の時間が必要になる。1校時だけでこれだけの内容を盛り込むには、教師の発問に対して、指名された生徒がその場で考えて発表をするという形式を取るしかなかった。それでも生徒たちは非常に優秀で、よく地図を見て、考え、発表をしてくれたと思う。

授業に関する生徒たちからの評価は現時点では聞いていない。生徒たちは大学の地理学の先生が出前授業をするというので、世界のどこかの国をテーマに体験談などを踏まえた面白い話をしてくれるものと期待をしていたであろう。それが、江戸時代の地図を見せながら、城下町の話をしたのだから、これのどこが地理の授業なのか。日本史の授業ではないか、と思ったことであろう。教師側の理念のみが先走った独りよがりな授業であったが、生徒たちに知的な刺激が与えら

れ、大学の地理学に少しでも関心を持ってもらえれば望外の喜びである。

#### 文 献

金沢市史編さん委員会編 1999. 『金沢市史 資料編18 絵図・地図』金沢市.

清水靖夫・長岡正利・渡辺一郎・武揚堂編著 2002. 『伊能図』武揚堂.

田川捷一 1995. 『加越能近世史必携』北國新聞社.

田中喜男 1980. 『加賀百万石』教育社.

矢守一彦 1970. 『都市プランの研究 変容系列と空間構成』大明堂.

資料1

学習指導案

授業担当者 宮内久光  
(琉球大学法文学部)

- 日時 平成23年10月3日(月)5時限目
- 対象 沖縄県立八重山高等学校2年1・6組(39名)
- 本時の主題 城下町の構造と空間パターンー金沢を事例にー
- 本時の目標
  - ・江戸時代に作製された城下図に親しませる。
  - ・金沢城が建設された場所の立地条件を地図から考察させる。
  - ・城下町の空間パターンを模式的に捉え、その理由を考察させる。
  - ・地図から権力関係を考察させる。

5. 本時の授業展開

内容	教師の働きかけ(教授活動)	生徒の学習活動	教師の留意点
あいさつとプリント配布 日本三名園	◆号令・出席確認、プリント配布。 ◆3枚の画像(日本三名園)を黒板に貼る。 質問「これから順番に別々の場所の写真を3枚貼りますが、3枚の場所はまとめて何と呼ばれているのか、分かた人は教えてください。」	◆日直号令、プリントを受け取る。 ◆画像からどのようなグループなのか考える。 ＜応答予想＞ 特に無し。 ◆公園名を聞いたところで、場所を知っていたら答える。 ＜応答予想＞ 特に無し。 ◆説明を聞く。	◆大きな声で、一人ひとりの顔を見ながら行う。 ◆各庭園の見どころが写っている画像を用意する。生徒はなじみが少ないので、もし正解者が出たら褒める。 ◆三名園のみどころを話すことで興味を持たせる。公園の所在都市名の正解者が出たら褒める。 ◆日本三名園が今日の授業とどのような関連しているかを説明することで、生徒に今日の授業に関心をもたせる。

展開① 10分	前田氏と加賀百万石	城下町金沢を建設した前田氏について、前田利家の略歴を中心に前田家が全国最大の所領を有する大名になるまでの過程を、プリントを用いて説明する。その途中で、次の質問をする。 ①「賤ヶ岳の合戦は誰と誰の戦いで、誰が勝ちましたか。」 ②「関ヶ原の合戦は誰と誰の戦いで、誰が勝ちましたか。」 ③「大名とはどれだけ以上の石高の所領を持っている武将ですか」 ④「全国第2位の石高を持っていた大名は誰ですか」	◆説明を聞きながらプリントに、「前田利家」「東軍」「120(万石)」と書き込み、内容をまとめていく。 さまざまな質問に答えていく。 ＜応答予想＞ ②以外は答えが出ない。	◆前田利家のさまざまな画像を見せるとして、生徒に興味を持たせる。また、日本史と今日の授業は関連していること、日本史の知識の定着を図ることも意識しておく。
展開② 13分	金沢城とその立地条件	◆金沢城の立地条件を地形と関連付けて考察させる。 指示「図1の地図中でお城のマークを探して、金沢城の場所を確認して下さい。」 質問「前田利家はどのようにして金沢城をこの場所につくったのでしょうか。図1の地図をよく見て、お城の場所の地形上の特徴と、その特徴から導かれる軍事面や領国支配で有利な点を考えて、プリントに答えを書いてください。」 生徒を指名し、答えを聞く。答えは板書する。	城跡マークを探し、場所を確認する。 地図をみて、プリントに金沢城のある場所の地形上の特徴と、軍事面や領国支配で有利な点を考えて、予想を書く。 ＜応答予想＞ ○地形上の特徴 ・2つの川に挟まれている。 ・台地上にある。 ・平野と台地の境目にある。 ○軍事面や領国支配で有名どころ ・敵の攻撃を受けても守りやすい。 ・農村支配が容易。 ・街道沿いで交通が便利。	机間巡視して確認する。 机間巡視して生徒のでき具合を確認する。 生徒からの答えは否定しない。
		答えの内容を地図上で一つずつ確認する。	答えを地図上で確認する。	

<p>江戸時代 金沢の城 下図</p>	<p>◆江戸時代に作製された金沢の城下図を紹介し、その特徴を説明する。「延宝金沢図」(複写)を黒板に貼る。地図の大きさや色、縮尺、方位、精度、記入内容について説明をする。大きさ(東西166cm, 南北190cm)色(黒, 赤, 紺, 橙, 青)縮尺(約1/2,100)方位(四方位で東が上になっている)精度(ほとんど現在の地図と一致)記入内容(藩施設名, 侍屋敷名, 寺社名, 町屋, 河川名などが詳しく記載)</p>	<p>◆城下図を鑑賞し、特徴を聞く。回覧されている「延宝金沢図」(縮小複写)を見る。城下図の特徴を聞き、理解を深める。</p>	<p>地図の芸術性について各自で堪能できるように配慮する。縮小された「延宝金沢図」を実際に手にすることで細かい部分や色を確認させる。縮尺はD社製住宅地図(1/2,500)と比較し、イメージをつかませる。町屋は名前が無く、身分の違いが図に表れていることを意識させる。模式図は大胆にデフォルムして書くことを勧める。</p>	<p>◆延宝の金沢を見ながら、黒板に城下町の空間パターンの模式図を描く。それを生徒に写させる。 1, 二本の川に挟まれた台地の先端に金沢城が建設される(川は青, 台地は黄)。 2, 内堀と外堀を掘る(堀は青)。 3, 北国街道を描く(街道は赤)。</p>	<p>江戸の大名屋敷と金沢の家臣屋敷が同じ名称であることに気付かせる。</p>
<p>江戸時代 城下町の 空間パター ン</p>	<p>◆図4延宝の金沢を見ながら、黒板に城下町の空間パターンの模式図を描く。それを生徒に写させる。 1, 二本の川に挟まれた台地の先端に金沢城が建設される(川は青, 台地は黄)。 2, 内堀と外堀を掘る(堀は青)。 3, 北国街道を描く(街道は赤)。</p>	<p>◆城下図を鑑賞し、特徴を聞く。回覧されている「延宝金沢図」(縮小複写)を見る。城下図の特徴を聞き、理解を深める。</p>	<p>◆城下町の空間パターンを参考に、城下町の様子や色、縮尺、方位、精度、記入内容について説明をする。大きさ(東西166cm, 南北190cm)色(黒, 赤, 紺, 橙, 青)縮尺(約1/2,100)方位(四方位で東が上になっている)精度(ほとんど現在の地図と一致)記入内容(藩施設名, 侍屋敷名, 寺社名, 町屋, 河川名などが詳しく記載)</p>	<p>◆延宝の金沢を見ながら、黒板に城下町の空間パターンの模式図を描く。それを生徒に写させる。 1, 二本の川に挟まれた台地の先端に金沢城が建設される(川は青, 台地は黄)。 2, 内堀と外堀を掘る(堀は青)。 3, 北国街道を描く(街道は赤)。</p>	<p>江戸の大名屋敷と金沢の家臣屋敷が同じ名称であることに気付かせる。</p>

<p>江戸時代 城下町の 空間パター ン</p>	<p>◆図4延宝の金沢を見ながら、黒板に城下町の空間パターンの模式図を描く。それを生徒に写させる。 1, 二本の川に挟まれた台地の先端に金沢城が建設される(川は青, 台地は黄)。 2, 内堀と外堀を掘る(堀は青)。 3, 北国街道を描く(街道は赤)。</p>	<p>◆城下図を鑑賞し、特徴を聞く。回覧されている「延宝金沢図」(縮小複写)を見る。城下図の特徴を聞き、理解を深める。</p>	<p>◆城下町の空間パターンを参考に、城下町の様子や色、縮尺、方位、精度、記入内容について説明をする。大きさ(東西166cm, 南北190cm)色(黒, 赤, 紺, 橙, 青)縮尺(約1/2,100)方位(四方位で東が上になっている)精度(ほとんど現在の地図と一致)記入内容(藩施設名, 侍屋敷名, 寺社名, 町屋, 河川名などが詳しく記載)</p>	<p>◆延宝の金沢を見ながら、黒板に城下町の空間パターンの模式図を描く。それを生徒に写させる。 1, 二本の川に挟まれた台地の先端に金沢城が建設される(川は青, 台地は黄)。 2, 内堀と外堀を掘る(堀は青)。 3, 北国街道を描く(街道は赤)。</p>	<p>江戸の大名屋敷と金沢の家臣屋敷が同じ名称であることに気付かせる。</p>
<p>江戸時代 城下町の 空間パター ン</p>	<p>◆図4延宝の金沢を見ながら、黒板に城下町の空間パターンの模式図を描く。それを生徒に写させる。 1, 二本の川に挟まれた台地の先端に金沢城が建設される(川は青, 台地は黄)。 2, 内堀と外堀を掘る(堀は青)。 3, 北国街道を描く(街道は赤)。</p>	<p>◆城下図を鑑賞し、特徴を聞く。回覧されている「延宝金沢図」(縮小複写)を見る。城下図の特徴を聞き、理解を深める。</p>	<p>◆城下町の空間パターンを参考に、城下町の様子や色、縮尺、方位、精度、記入内容について説明をする。大きさ(東西166cm, 南北190cm)色(黒, 赤, 紺, 橙, 青)縮尺(約1/2,100)方位(四方位で東が上になっている)精度(ほとんど現在の地図と一致)記入内容(藩施設名, 侍屋敷名, 寺社名, 町屋, 河川名などが詳しく記載)</p>	<p>◆延宝の金沢を見ながら、黒板に城下町の空間パターンの模式図を描く。それを生徒に写させる。 1, 二本の川に挟まれた台地の先端に金沢城が建設される(川は青, 台地は黄)。 2, 内堀と外堀を掘る(堀は青)。 3, 北国街道を描く(街道は赤)。</p>	<p>江戸の大名屋敷と金沢の家臣屋敷が同じ名称であることに気付かせる。</p>



資料2 配布プリント



城下町の構造と空間パターン—金沢を事例に—

①加賀藩藩祖 \_\_\_\_\_ (1539-1599)

- ・織田信長の家臣。妻は「まつ」。
- ・賤ヶ岳合戦の後、豊臣秀吉から能登および加賀2国（石川県）を与えられ、金沢城に入る。

・豊臣秀頼の後見人で五大老の一人として豊臣政権を支える。

cf.五大老・徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、

小早川隆景（のち上杉景勝）

②関ヶ原の合戦（1600）・・・前田利長（利家の子）が \_\_\_\_\_ 軍で参戦。

→徳川家康より能登・加賀に越中（富山県）も加増され、約 \_\_\_\_\_ 万石の大名になる。  
のち、富山藩（10万石）、大聖寺藩（7万石）を分藩する。『加賀百万石』←大名家最大

課題1. 前田氏はどうして加賀藩の拠点としてこの場所（金沢城の場所）を選んだのでしょうか。下の図1を見て、この場所の地形面の特徴から理由を考えてみましょう。

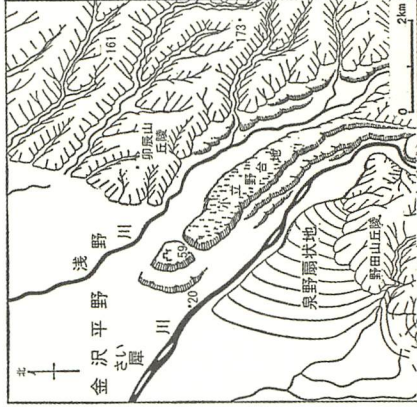
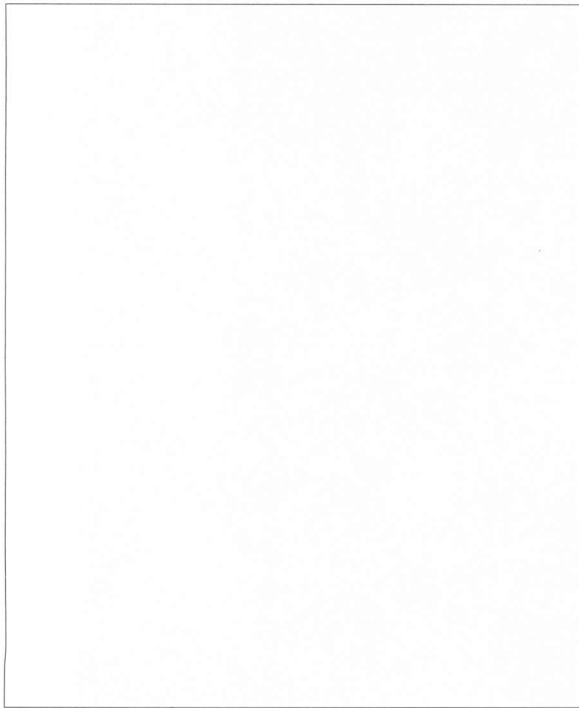


図1 金沢市の地形

	<p>ヒント 寺社や上屋敷は敷地や建物が広い。軍事拠点になる。</p> <p>説明 「例えば、北国街道沿いを越前福井方向から攻めてくる敵を、前田軍はまず寺社群で防壁し、これが敗れると堀川を挟んで戦い、これも敗れると堀の内側の上屋敷に陣を置いて戦い、これも敗れると城内で籠城戦を行います。」</p> <p>越中富山方向から攻めてきても、同じような防壁システムとなっていることを説明する。また、金沢の事例は他の城下町でも当てはまることを説明する。</p> <p>◆加賀八家の中で筆頭の家臣は誰かを図4から考えさせる。</p> <p>発問 「ところで、さきほど加賀八家の上屋敷や下屋敷を確認しましたが、この八つの重臣の中で、最も家柄の高い筆頭の家臣は誰でしょうか。地図を良く見て考えてください。」</p> <p>回答が出たら</p> <p>「どうしてその家臣が筆頭の家柄だと見えるのか、理由を教えてください。」</p> <p>本多安房守が5万石を有することを説明し、図4から拝領した屋敷面積が最も大きいこと、名前に「守」という官位が唯一付いていることを説明する。</p>	<p>説明を聞き、理解する。</p> <p>金沢の空間パターンが当時の城下町の一般性を持っていることに気付かせる。</p> <p>状況に応じて、屋敷の面積や名前の表記などヒントを与える。</p> <p>◆加賀八家の筆頭を図4を見て考える。</p> <p>＜応答予想＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前田対馬</li> <li>・本多安房守</li> </ul> <p>＜応答予想＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・城に近い</li> <li>・街道沿いである</li> </ul>	<p>説明を聞き、理解する。</p> <p>金沢の空間パターンが当時の城下町の一般性を持っていることに気付かせる。</p> <p>状況に応じて、屋敷の面積や名前の表記などヒントを与える。</p>
<p>まとめ 2分</p>	<p>◆授業の復習を行う。</p> <p>「金沢は戦争の被害や地震の被害がほとんど無く、江戸時代の街路などがそのまま残っている町です。江戸時代の建物も残っています。」</p> <p>「今日の授業は日本史の話のように思っただけかもしれませんが、大学では地理学で扱います。何故、江戸時代の話が地理学で扱っているのか、みなさん考えてみてください。」</p> <p>◆号令・あいさつ</p>	<p>◆説明を聞く。</p> <p>◆日直号令</p>	<p>時間が余れば、現在の金沢の画像（武家屋敷、寺町、城址、東茶屋、香林坊繁華街、浅野川、犀川など）を見せ、城下町に親しみを持たせる。時間が余れば、今日の授業の内容が何故地理学で扱っているのかを考えさせる。</p>

<p>この場所の地形上の特徴</p>	<p>軍事面や領国支配で有利なところ</p>
--------------------	------------------------

○城下町の空間パターン（模式図）  
「延宝金沢図」（1673-1680作製）



城下町の空間パターンの特徴

1. 城下町では武家屋敷、足輕屋敷、町人屋敷など身分別に居住地が決まっていた。
2. 城を中心に上屋敷、内堀、外堀、下屋敷、足輕屋敷、二つの川（犀川・浅野川）、寺社、と同心円的に配置した。  
→城下町の防衛・・・特に上屋敷と寺社は広い敷地と建物を持ち、防衛機能が高い。
3. 町人は北国街道沿いに密集して居住。

課題2. 加賀八家のうち、最も格式が高い家臣は誰だと考えられますか。その理由を「延宝金沢図」から推測してください。

予想される家臣・・・ \_\_\_\_\_ 正解・・・ \_\_\_\_\_

理由

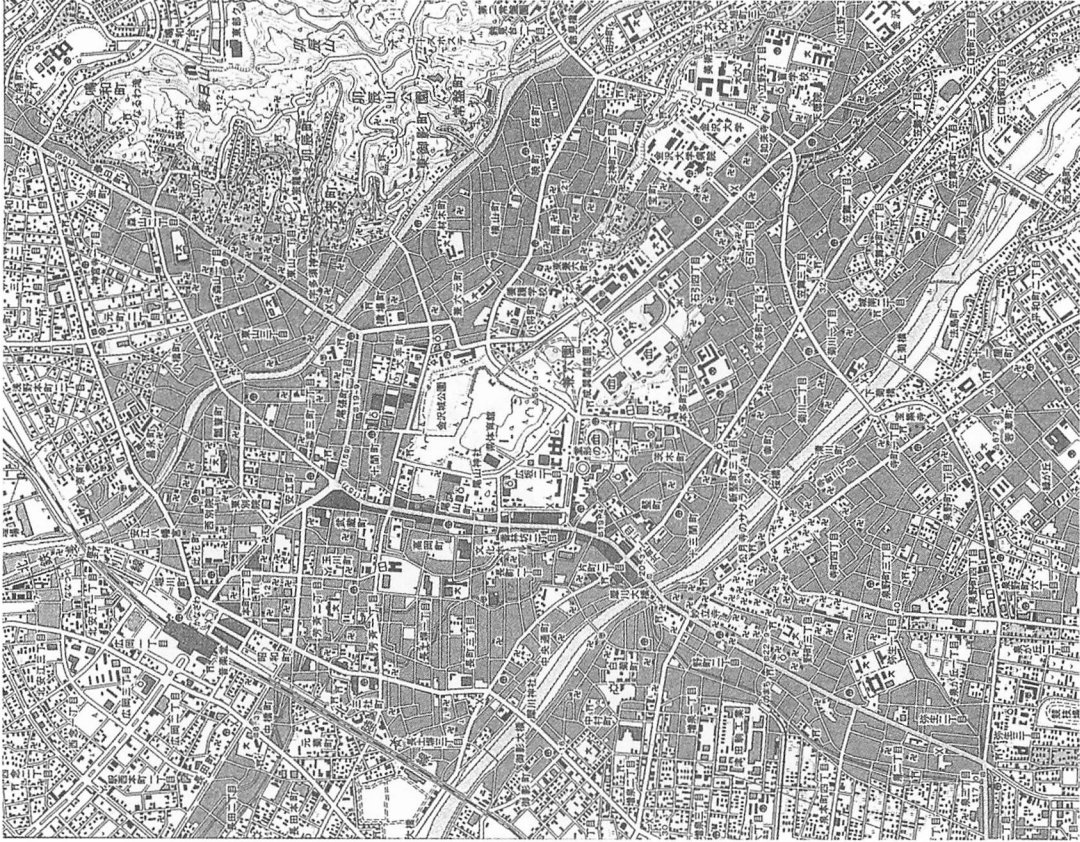


図2 1/25,000地形図「金沢」（平成18年更新）



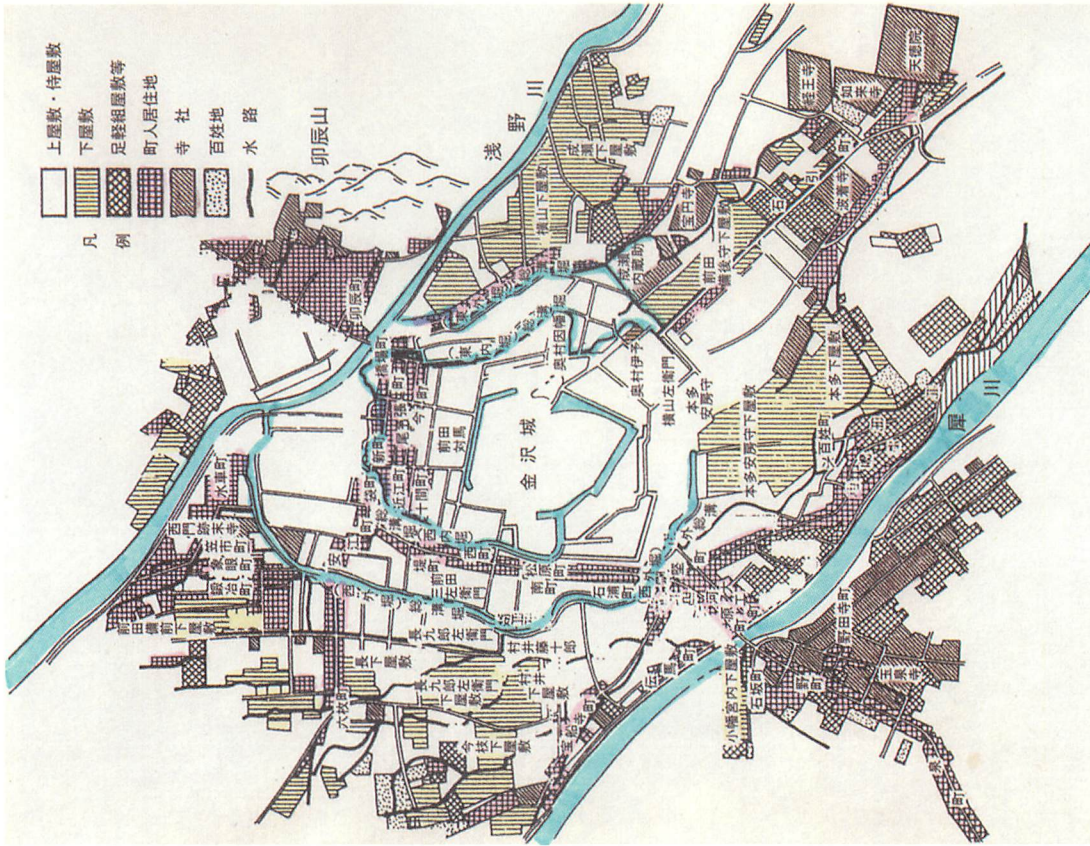


図4 延宝年間の金沢 (田中喜男『加賀百万石』をもとに作図)

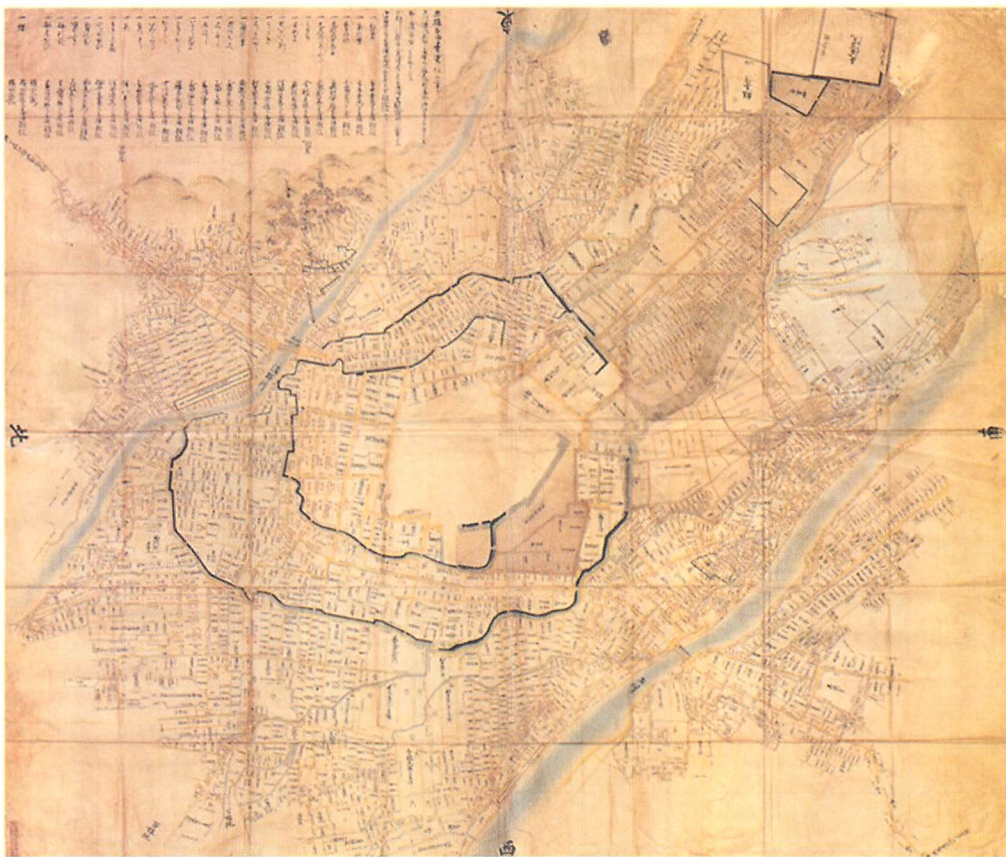


図3 「延宝金沢図」(石川県立図書館蔵) 1/25,000に縮小